

テキストのアイデンティティー、 或は、テキストの相関性に関するディスコース

Textual Identity: Discourses of Textual Interrelation

Edward Mack (University of Washington, Seattle)

本日はお招きいただき、ありがとうございます。もともとこの発表については去年コロンビア大学で行った非公式な議論の延長と考えていたので、普段より抽象的なテーマで、そして結論はまだ仮説であるということをご理解いただければ幸いです。

プログラムによると発表のタイトルは「日本文学の周辺？戦前のブラジル移民と書物」ですが、抽象的な概念に焦点を当てたいと思いますのでより曖昧な「テキストのアイデンティティー：テキストの相関性に関する言説」という新しいタイトルにしました。

アイデンティティーとは、つまり、物質、本質、固有性において同一性も持つ状態のことであり、どのようなアイデンティティーであれ、論理的に、三つの対象を必要とします。ある対象のアイデンティティーを規定するには、その第一のものと同じであることを証明する第二の対象、そして相違を際立たせるための第三の対象が必ず必要となります。したがって、それは、単にある固有性の説明にとどまるものでなく、相関性を主張することなのです。

自分の研究対象を「近代日本文学」と同定する時、そのディスコースを可能にする相関性の基盤とはいったいどのようなものであるのか。アメリカでこういう「自分の文学」以外の文学を教えるときには、研究の対象の境界線を明確にせざるを得ないのです。

「近代日本文学」という範疇に中心をおくディスコースを通して、我々はどのようなテキストの相関性を推定、または主張するのか？そして、その結果はなんなのでしょうか。こうした大きな問題に対して私の考えはまだ初期的な段階にあり、今回は議論を導き出すための考察の発表にとどめたいと思います。

境界に位置するブラジル日系移住者によって書かれた日本語文学などの ケーススタディーは、この大きな問題を考える一つのてがかりになると思います。ブラジルで書かれた所謂「植民地文芸」はナショナル・リテラチャーという概念に内在する複雑な問題群に対してどのようなことを語るのか。ブラジルで書かれたテキストと「近代日本文学」というテキストの相関性に関するディスコースとのあいだにはどういう関係があるのでしょうか。この疑問を「これは日本文学であるのかそうでないのか？」と単に置き換えてしまわないことは非常に大切なことなのです。というのも、この後者の疑問の形は周辺にあるものを周辺に押しやることによって中心を実体化し安定化するからです。かえって、このテキストと「近代日本文学」の関係がその構造化されたディスコース自体の中の矛盾を浮き彫りにすると思います。

「近代日本文学」と見なされるテキストはどのようなテキストか、その意味を問題にする前に、当時の作家と評論家の使った「植民地文芸」という範疇について検討したほうがいいと思います。いうまでもないですが、ブラジルの作品群と、大日本帝国の他の場所で植民地文学と呼ばれた作品群は、「植民地文芸」という範疇において繋がります。これらのテキスト群の関連性を主張すれば、その理由は正当化されるのでしょうか？ブラジルは文字通りの植民地ではなかったが、大日本帝国は各々の植民地に対して非常に違った法実質的な立場で関わっていました。朝鮮と台湾は正式に日本に併合された植民地であり、そこにおける非植民地人は大日本帝国へ同化させられたのです。一方、満州では独立国とは単なる名義上のもので、大日本帝国の属国でした。サハリンは初め植民地であったのが 1942 年に日本に吸収されました。ミクロネシア諸島では日本は委任統治権を持っていました。日本国家の構成区域とされる、沖縄は 1929 年、北海道は 1947 年まで他県と同等の地位を持たなかったのです。

言うまでもなく、ブラジルは、20 世紀において主権国家でした。一方、ブラジルのコロニアの多くは日本政府と関係のある組織に運営され、政治的な自治権はある程度にありました。さらに重要なことは、このコロニアが文化的にブラジル社会と隔たっていて、そしてそのメンバーは自分が「日本人」とある程度に考えていました。そのせいで、一部のブラジルの政治家は日系コミュニティを自分たちの国のなかの「囊腫」（異質な細胞）と見なしていました。日本の政治家や帝国主義的な知識人たちはブラジルの日系コミュニティが正式な植民地と類似した機能を果たしうると考えていました。つまり原材料の供給源や商品の市場、国内の過剰な人口の移住先。そして、日本諸島の域外にあり、親日的な影響を与えることができる場所。帝国主義的な野心を移民の性質のなかに見出すことは行き過ぎですが、少なくとも日本の植民地経営という範疇のなかで、「コロニア」つまり、ブラジルの日系コミュニティを考えることは可能であると思います。

しかしながら「植民地文芸」という概念は、日系コミュニティの政治的な機能というよりはむしろ文学テキストのアイデンティティーを中心に据えているのです。テキストのアイデンティティーをつくり出す「日本近代文学」というナショナル・リテラチャーのディスコースもそうであるように、グループ分けは共有された言語、歴史、文化または文学的影響に基づいているはずのテキスト間の関連を暗示しています。もともと根本的なレベルで共有されている民族的人種的な観点でも暗黙のうちに共有されているのではないのでしょうか。が、その暗黙のうちに維持されている共有物が崩れることのないまま、どれほど多様になりうるのでしょうか。移民の歴史などは、いつ内地の共有された歴史（こういうのも本当にあるとすれば）から離れることができるのでしょうか。言い換えれば、ブラジルで書かれた日本語文学はいつ「日本文学」ではなくなるのでしょうか。

ブラジル日系人コミュニティ内で文学の果たした機能を考察することは有効であると思われる。テキストは、東京起源であれ、サンパウロ起源であれ、日本語で印刷され、移民の生活のなかで重要な役割を果たしたのです。新着本の在庫が地元の新聞の広告で宣伝されたので、大量の書籍が複数の書店で手に入ることができました。雑誌も日本から輸入されました。たとえば、1935 年 8 月だけでも「キング」が 3500 冊輸入されています。またブラジルでも書籍は

出版されました。新聞は日本、そしてブラジル両方から入手可能でしたが、地元のものを読む傾向が強かったのです。日本語による出版物一般、特に日本文学は移民の生活の中で大きな役割を果たしたようです。まだ議論の余地があるのですが、本国にすむ日本人以上に文学がブラジル移民に果たした影響は大きかったのかもしれませんが。小説、その他の本や雑誌は日本から輸入されたが、最も広くそして定期的に読まれたであろう連載小説は、地元の新聞に掲載されました。こうした紙面で、事実、「植民地文芸」についての議論がおこったのです。

当時のブラジルで出版された様々な作品を関連付けた「植民地文学」という議論は、雑誌新聞両方において、二つの重要な役割を果たしました。一つ目は他の植民地で出版されている文学との同一化を、もう一つは、日本における文学との差異化をはかりました。議論のなかのいくつかのポイントを押さえると、1) 日本の文壇は腐敗しており、従ってそれは日系ブラジル人が模倣すべき対象でないこと。2) ブラジルは正式な植民地ではないが、ブラジルと朝鮮等の日本語文学を等価に見ること。3) 国民国家の日本からの隔たりを主張しながら、日本人との「人種的」な連がりの容認。

最後の二つのポイントはブラジルの日系植民地つまり、「コロニア」と他の大日本帝国の植民地を決定的に分つ差異を導きます。そしてこの差異は文学生産の文脈において特に重要性を帯びます。他の植民地には「人種的に」日本人でないにも関わらず日本語の読み書きができ、日本語の文学を消費生産するのに十分な言語能力のある人口は多かったが、ブラジルではその人口がゼロに近かった。つまり私の知っている限り、ブラジルの日系植民地において誰が「日本人」で誰がそうでないかという議論はおこらなかった。民族的なアイデンティティーの議論は同化の問題に触れず、「生物学的な事実」を基礎にほとんど問題なく受け入れられていた。混血の問題は後に調査するつもりです。

植民地文芸の議論に関わった作家や批評家は人種的、言語的に大日本帝国との継続関係を認識していたましたが、自分が帝国の臣民である、自分が所謂「日本文学」に携わっているとは思いませんでした。テキストの市場の性質上、文学生産の最も大きい影響が日本からくるにも関わらず、自分たちの文学は日本のものとは本質的に違う、ある特定の環境状況から生まれ自分たちの特定の必要性に応じるものと信用していた。

ブラジル日系社会の現在の事情のお陰で、「植民地文芸」についての議論は重要性の低いものになっているのかもしれませんが。ブラジルは世界のなかで、1500万人と、日本以外の日系の最も多い国にも関わらず日本語の文学を読むことのできる人口が非常に少ないのです。そうは言っても、ほとんど一世に限られている、日本語を使っている少数の作家と読者たちは地元の日本語文学を積極的に生産し支援しているのですが。ブラジルの日系人は自分のアイデンティティーを Nipo-Brasileiros としているが言語の障壁のため、日本語による文学活動に参加できないのです。これらの日系読者は日本文学にたいして、他のブラジル人たちと同じように接するのです。たとえば1999年の吉川英治の「宮本武蔵」のポルトガル語の翻訳に接するように。ブラジルで読まれている日本文学とは、「武蔵」のように日本に書かれたものです。ブラジルで生産された日本語文学がブラジル文学全体へ与えた影響はほとんどないようです。

このような状況を察すると、ブラジルの日本語文学は、日本（またはブラジル）のナショナル・リテラチュールとべつなものとなり、植民地文芸、移民文学、ブラジル日系文学、またはコロニア文学という項目のもとに統括されるべきではないでしょうか。

この仮説が、1975年から出版された四巻本の「コロニア小説選集」の編集の目的です。このシリーズの解説で、文化人類学者である、前山隆は日系ブラジル移民は自分たち自身の文学史を持っていないと書いています。前山によれば、作家たちは容易に手に入る日本のテキストに影響を受け、そして、近代日本の文学史に生産者ではなく、消費者として参加した。彼のいう「文学史」という概念は本質主義的なものではないのです。つまり、それは、共有された「民族性」によって関連付けられた文学作品の連続的な説明ではなく、もっと具体的な意味でその連続性を主張しています。一つの世代の文学活動が次の世代にエネルギーを伝える一連の出来事、つまり影響力のことなのです。

前山は、彼独自の意味での文学史の不在の原因をブラジルにおける日本語書籍の出版、そして入手の難しさに見いだしています。個々の作家は互いの作品を交換して読み合うことはできるが、広汎の販売経路は存在せず、コロニア・ヤポネシア、つまり、日系コミュニティーの文学史へのインパクトはそれほどなかったのです。販売経路を経て広範の読者が生まれるような文学環境を作るためこそ、コロニア文学会（Gremio Literario “Colonia”）が資金を出し、全集を編集、出版しました。アンソロジーは既に存在する「文学史」を表象するものでなく、これからの「文学史」を可能にするために共有しているテキスト群を集めたわけです。これらの本は単に既に存在する必須のカテゴリーの概念を広める器ではなく、そうしたカテゴリーを作りだす道具なのです。

まだ議論の余地があるのですが、これは例外ではなく法則のようなものでしょう。おそらくテキストの相関性をつくり出すディスカールは資本主義経済のなかで機能しているのだと思います。そのディスカールが消費者のアイデンティティー（国民として、または移民として）を通して、ある文学商品との繋がりを作ります。そこで、その消費者が作品を買えば、書く行為を経済的に支援するのです。この過程でこういうディスカールが文学を可能とする。そして、世界システム論が論じるように、国民国家に基づいている資本主義経済は自立しているものではなく、世界経済の一部として機能しています。それは、文学作品についても当てはまります。国家の概念のもとにまとめられたテキスト群とそれに関するディスカールは、国際社会において自国へのプライドを再強化し、文学の国際市場が存在する限り、その市場で文学作品を浮かび上がらせることもできます。特に日本語文学に関して言えばその市場の規模が小さいかもしれませんが、パスカル・カザノヴァ（『世界文学空間：文学資本と文学革命』2002年）が論じるように、その規模をこえて、影響力は持ちうるのです。国民国家のレベルでも、国際レベルでも、こういうディスカールを作り、再生産するところは、大学などの教育機関です。

もとの質問にもどって、訊き直しましょう。ブラジルで生産された日本語文学は、日本国家という概念によってまとめられるテキストの連関、つまり「近代日本文学」に組み込まれること

によって何を求めるのか。テキストの起源の特殊性は消去され、あるいはエキゾチックなものになる危険性はあっても、テキストはこれまでなかった読者を獲得し、その存在を継続させようのです。作家は、新しい市場をとおして、読者を獲得する。それは社会現象としての文学のかかげざるを得ない構成要素であるのです。と同時に、消費者をも獲得する。それは、どのような芸術家であれ、しばしば軽んじられるが、生活を支えるのに必要不可欠であるのです。

これらの考察から得られる結論は多様です。ジャンルとして、そして、一般的な意味の場の地平線として機能する、テキストの相関性をつくり出すディスクールは自然発生的に生まれたものではない。したがって問題として認識されなければなりません。個人の主体性が断片で多様であるとして認識されている現在、テキストのアイデンティティーが「自然なる国民の伝統」、つまり、仮想された文化的人種的なアイデンティティーに基盤をおくと認識されていることは特に驚くべきことです。

と同時に、こうした言説の創造や普及に我々が加担していることを認識する必要があります。これらが機能する第一の場所は教育機関なのです。それは多分にして、教育機関の構造によって「近代日本文学」などのディスクールは統一された知の対象として存在するのです。どの程度、我々は「近代日本文学」の存在に責任があるのでしょうか。

最後に、資本主義経済のシステムにおいて、芸術としての文学が長期にわたって生き延びるためには、少なくともある程度は、商品としての価値に依拠しており、このようなシステムにおけるテキストの相関性に関するディスクールの、本質的な重要性を認識する必要があります。

まだまだ言い足りないこともあるのですが、これらの結論が示唆するのは、「近代日本文学」として知られている、テキストの相関性をつくり出すディスクールにたいして、われわれは、懐疑的にそして戦略的にアプローチしなくてはならない。テキストのアイデンティティーの他の形を主張できるように、脱構築しなければならないということではないでしょうか。

“Textual Identity: Discourses of Textual Interrelation”

Edward Mack (University of Washington, Seattle)

Thank you for inviting me to speak here today. I had originally thought this would be a continuation to the informal discussion that we began last year, at Columbia University, so the issues I am discussing today will be more abstract and the conclusions will be more tentative than I would normally like. Thank you for your understanding.

My talk was originally entitled “Nihon kindai bungaku no ‘shûhen’? Senzen no Burajiru imin to shomotsu.” Although my talk still addresses the same general topic, I have decided to focus on the more abstract concept named in my new title: “Textual Identity: Discourses of Textual Interrelation.”

It perhaps goes without saying that any identity - the state of being the same in substance, nature, or properties - requires the presence of three objects. For any one object to claim an identity, there must be a second object with which it identifies and a third object from which it differentiates itself. It is not, therefore, simply a description of properties, but a claim of interrelation.

When we identify our object of study as “modern Japanese literature,” then, what is the basis for the putative interrelation that would enable such a discourse? This is a question that might not seem so obvious in Japan, where the category may seem so natural as to be axiomatic. When taught in the United States, however, the need to assert boundaries to the object of study is unavoidable.

What textual interrelations, then, do we assert (or presume) through a discourse centered on a category of “modern Japanese literature,” and what are the ramifications of that discourse? I am only at the beginning of thinking about this problem, so I would like to present some initial thoughts on the matter for general discussion.

One way to begin thinking about this question might be through cases that are presumably liminal, such as the Japanese-language literature written by migrants to Brazil. What can this so-called *shokuminchi bungei* tell us about the complexities inherent within the concept of a “national literature”? What is the relationship of these texts to the discourse of textual interrelation we know as “modern Japanese literature”? It is extremely important not to phrase this question simply as “is this Japanese literature or not,” a question which would further reify and stabilize the center by marginalizing this periphery. Instead, I believe that the relationship of

these texts to “modern Japanese literature” helps illuminate the instabilities inherent in that constructed category itself.

Before we ask what it might mean to include these texts under the rubric of “modern Japanese literature,” we might begin by considering the rubric some contemporary authors and critics in Brazil chose for them: *shokuminchi bungei*. Needless to say, this title linked the texts to discourses of “colonial literature” elsewhere within the Japanese empire. What justified this connection? Though Brazil was never a formal colony, the Japanese empire did include territories with significantly different legal and practical statuses: Korea and Taiwan were formally annexed territories, whose populations were to be assimilated into the greater Japanese empire, while Manchuria, despite becoming a nominally sovereign state, was a dependency of the empire. Sakhalin began as a colony but was absorbed, in 1942, into the Japanese state. Japan was the mandatory power over the islands of Micronesia. For that matter, even parts of Japan now considered integral to the nation-state played an ambiguous role in the empire: Okinawa did not enjoy equal status with other prefectures until 1919 and Hokkaidô did not until 1947.

In both name and substance, however, Brazil was a sovereign state. Many of the colonies the Japanese migrants formed, however, were operated by semi-governmental cooperatives and enjoyed some political autonomy. Perhaps more importantly, however, they were often culturally removed and their residents often self-identified as Japanese; partially as a result of this, certain Brazilian politicians perceived the colonies to be imperial “cysts” within their state. Japanese politicians and pro-imperial intellectuals saw these communities as capable of performing functions similar to those of the formal colonies, including acting as a friendly source of raw materials and a market for goods; as an outlet for the nation’s “excess” population; and as the source of pro-Japanese influence beyond the main Japanese islands. Although it would be a mistake to attribute imperialist ambitions to the Japanese immigrants, then, at least to this extent it seems understandable that the migrants might have considered the *colonias* in Brazil to be on a continuum with other Japanese colonial holdings.

The concept of *shokuminchi bungei*, however, focused not on the political function of the communities, but on the identities of literary texts. As with the national discourse of textual interrelation, “modern Japanese literature,” the grouping implied connections among the texts based on common experience, language, literary influence, history, and shared culture; underlying all these seemed to also exist a firm belief in common “racial” identity. Please note that I use the term “racial” in order

to capture the logic of the debates at the time, not because I subscribe to them myself.

Every use of the term in this talk should be understood as appearing in quotations.

It might be useful to think about the function of literature within this community.

We know that texts printed in Japanese, whether originating in Tokyo or São Paulo, played a significant role in the lives of the migrants. Large quantities of books were available at multiple bookstores, with inventories of newly arrived stock printed in advertisements in the local newspapers; some magazines were imported from Japan, including 3500 copies of *King* in August 1935 alone, and some were produced in Brazil; and newspapers were available from Japan as well as from local sources, though most people seem to have read local papers. Japanese-language print in general, and Japanese-language literature specifically, seem to have played an important role in people’s lives; arguably a more important role than literature did in the lives of people in Japan. When they read fiction, the books and magazines they turned to were almost exclusively from Japan, but the newspapers - the source of the serialized fiction that was probably the most widely and regularly consumed - were locally produced. It was in their pages, in fact, that the debates about *shokuminchi bungei* occurred.

In the most general terms, this discourse linking the various works published in Brazil, in both journals and newspapers, under the term colonial literature, attempted to do two things: one was an identification with literature published in other colonies, and the other was actually a differentiation from the literature of Japan proper. Without going into too much detail, let me note some key points in the discourse. First is a general agreement that the Japanese *bundan* is corrupt, and therefore must not be mimicked by the more wholesome (though also more venal) members of the *colonias*. Second is an explicit recognition that Brazil is not a formal colony, but an equally explicit equation of their colonial literature with that in other colonies, specifically Korea. Third is an implicit acceptance of a fundamental “racial” link with Japan, even as explicit distance is asserted from the current polity of Japan.

These last two points lead to one key difference between the other colonies of the Japanese empire and the *colonias* of Brazil, a difference that is particularly important in the context of literary production. Unlike those other colonies, Brazil never had a significant population of readers and writers who were not “racially” Japanese, but who had sufficient linguistic ability to both consume and produce Japanese-language literature. That is, as far as I have discovered, that is, there was never any discussion in the colonies in Brazil of who was or was not “Japanese.” The discourse of “racial” identity, then, was never one of assimilation - forced or otherwise - but was

instead accepted for most as based in biological fact. This does not address those of mixed ancestry, whom I need to research further.

While the writers and critics involved in the debate did conceive of themselves as members of a “racial” and linguistic continuum, most of them did not primarily identify as subjects of the Empire or participants in the literature of Japan. This is despite the fact that, given the nature of the marketplace for texts, their greatest literary influences would likely have been from Japan. Instead, they perceived their literature to be one that would be fundamentally different, arising from the particular conditions of their existence and responding to the particular needs of their lives.

The legacy of empire in Brazil has, to a certain extent, made this discussion about Brazil’s colonial literature moot. Although Brazil has the largest population of individuals of Japanese descent outside of Japan in the world, at 1.5 million, only a small portion of those individuals have sufficient linguistic ability to read literature in Japanese. Having said that, a small band of dedicated writers and readers, almost exclusively first-generation immigrants, does continue to actively produce and support a local Japanese-language literature. While the majority of Nikkei Brazilians still strongly identify themselves as Nipo-Brasileiros, however, the language barrier often precludes participation in Japanese-language literary activities. Many of these readers access “Japanese literature” in the same way that their Brazilian countrymen do: through works such as the 1999 Portuguese translation of Yoshikawa Eiji’s *Musashi*.

The Japanese-language works of literature that were produced in Brazil seem to have had limited impact on Brazilian literature as a whole.

All of this might lead one to think that these works should be grouped separately from the two national traditions to which they might have claim, and bound under a rubric of *shokuminchi bungei*, or *imin bungaku*, or *Burajiru Nikkei bungaku*, or *koronia bungaku*.

This is, more or less, the goal of the 4-volume *Koronia shōsetsu senshū*. In the afterword to the series, the Japanese cultural anthropologist Maeyama Takashi writes that Japanese immigrants to Brazil lack a literary history of their own. Maeyama argues that writers were instead influenced by texts from Japan, which were more

*1 Some works have, however, appeared in Portuguese translation. Consider *A Mata das Ilusões*, a 1988 translation of Daigo Masao’s *Mori no yume* (1979) by Sonia Regina Longhi Ninomiya. Ninomiya is a professor at the Universidade Federal do Rio de Janeiro. *Mori no yume* is considered by many to be the greatest Japanese-language work of literature written in Brazil.

easily procured, and that the writers thus partook (albeit largely unilaterally, as consumers rather than producers) in the literary history of modern Japan. His conception of “literary history” is not an essentialist one: he means a sequence of causal events through which one generation of literary activity provides energy - influence - to the next, not just a sequential description of literary works linked by a shared “civilizational ethos.”

Maeyama attributes this absence of literary history to the difficulty of getting Japanese-language books published in Brazil. A given author could individually circulate his or her work, but the lack of broad distribution meant that a given piece of fiction had little impact on a whole that might be called, as Maeyama calls it, a literary history of the *colônia japonesa*. It is the creation of these conditions that motivated the creation of the collection, which was paid for, compiled, edited, and put out by the Koronia Bungakukai (Gremio Literario “Colônia”). The anthology is hoping not to represent a unity that exists, but to create that unity: to put in motion a literary history (as defined by Maeyama) that will cause that cultural unity to come into being. This collection is not a mere vessel to disseminate an ontologically necessary category; it is a tool by which that category is created.

Arguably, however, this is not the exception, but the rule; perhaps this is how discourses of textual interrelation function in a capitalist economy. The category itself, particularly one premised on a national collectivity, immediately invests readers in works with which, until they encounter that discourse, they might not have felt any particular identification. They then become more likely to buy the works, and thus finance the act of writing: they enable literature. It should also be noted that these capitalist economies are not, as world systems theory has shown, autonomous, but instead function as part of a global economy. The same is true of literary works. Discourses of textual interrelation premised on the nation-state have the benefit of reinforcing (and reproducing) national pride on an international stage, and can even buoy works in the global marketplace for literature, to the extent that such a market exists. That market might be small, particularly for Japanese-language literature, but

*1 This overlooks the heterogeneous influences that existed even for monolingual readers. For example, the *Burajiru jihō* newspaper serialized a translation of a novel by Bernardo Guimarães entitled, *Dorei no musume* (presumably *A Escrava Isaura* [1875]) in 1923.

as Pascale Casanova has recently shown, it possesses influence beyond its size.¹ It is a market that is made possible through translation and is often kept alive through educational institutions, such as this one.

Perhaps the question, then, is this: what does the Japanese-language literature written in Brazil have to gain from being incorporated into a discourse of textual interrelation based on the nation - that is, into "modern Japanese literature"? Such an incorporation, even as it threatens to erase or to exoticize the specificity of the texts' origins, would give the texts an audience that they do not yet enjoy, and which might enable their continued existence. Even as this new marketplace provides writers with readers - the essential social component of the art of literature - it also provides writers with consumers, an oft-dismissed necessity for any artist lacking the material means to support his or her avocation.

The conclusions to draw from these observations are multiple. On the one hand, we must recognize that these discourses of textual interrelation, which come to function as genres and thus functions as "the very horizon which defines the general semantic field," are anything but naturally occurring and therefore must be problematized.² At a time when individual subjectivities are being recognized as fragmented and heterogeneous, it seems particularly surprising to see a discourse of textual identity based on an "organicist national tradition," a presumed cultural or ethnic identity.³

At the same time, we must recognize our complicity in the creation and perpetuation of these discourses. The primary site of their functioning is, after all, academia. It is largely because of institutional structures that a discourse such as that of "modern Japanese literature" can exist as a unified object of critical knowledge.⁴ To what extent are we responsible for the existence of "modern Japanese literature"?

*1 Pascale Casanova, *The World Republic of Letters* (Cambridge: Harvard University Press, 2004).

*2 Aijaz Ahmad, *In Theory: Classes, Nations, Literatures* (London: Verso, 1992) 251.

*3 Linda Hutcheon, "Rethinking the National Model," eds. Linda Hutcheon and Mario J. Valdés, *Rethinking Literary History: A Dialogue on Theory* (Oxford: Oxford University Press, 2002) 26.

*4 Ahmad 246, 263.

* Please do not reproduce, circulate, or cite without permission from the author.

Finally, we must recognize the essential value of such discourses of textual interrelation within a capitalist economy system, in which the long-term survival of literature as an art depends, at least to some extent, on its viability as a commodity.

As chimerical as these groupings may be, they are often essential for both the production and consumption of literary texts.

Far more remains to be said about this issue. What these preliminary conclusions suggest, however, is that the discourse of textual interrelation known as "modern Japanese literature" must be approached both skeptically and strategically; it must be deconstructed so as to allow the assertion of alternate forms of textual identity, and yet, so long as it continues to hold sway, it may also be manipulated so as to allow the continued production of literary texts in global capitalist economy.

日本大学学術フロンティア推進事業 Proceedings of the JLDAP

アーカイブス、その展望と歴史

2007年7月14日 発行

編集 森井 マスミ

発行所 日本大学文理学部 情報科学研究所
日本語日本文学デジタルアーカイブプロジェクト

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

電話 03-3329-1151(内線 8493)